
コロナ禍で試みた教育実践報告

～英語 Output と英語専門科目の場合～

長谷川 秀子

はじめに

コロナ禍により大学ではオンライン授業が始まった2020年前期は、事前収録配信（オンデマンド）、リアルタイム配信、課題授業、そして後期は、それに加え科目の特性や感染状況、学生の状況などを見ながら、対面授業、ハイブリッド授業という形式が加わった。

オンライン授業と対面授業はどちらが良いのかという話が出るが、両方とも授業は授業であり、教員や学生にとって学びの場の環境が違い、個人差も多種多様であり、オンライン授業が良いとする人もいれば、そうでない人も出てくる。通信教育との違いを考えてみると、通信では初めから学生が個人で教科書や本を読んだり、映像を見たりして自己学習し、試験を受け、エッセイを書き、時にはスクーリングで大学に通うこともある。しかし、忘れてはならないのは、コロナ禍におけるオンライン授業というものは、予め教室での対面授業を想定したものだということだ。そして、このアレンジは思いの外、時間もかかり、対面授業とは同じことができないことも多く、別のアプローチ、別の課題、別の試験という結果になり、評価にも悩まされることになった。

「授業のオンライン化」とは、オンライン用に「もうひとつ別の授業」を作ることあるのではないか。

中原（2020）*1

大学の授業とは

大学とは、中世のヨーロッパでは上級学部として神学、医学、法学があり、エリート教育であり、文法、修辞学、論理学の三学と算術、幾何学、天文学、音楽の四科は自由七科（seven liberal arts）と言われていた。今日においては、世界中で教養を育み、専門的な知識を学ぶことが大学とされている。カント哲学者の天野貞祐（1964）は「大学は学問を通じての人間形成の場である」と提唱している。まさに学びながら、自己を磨いて高めていくということが根本にあり、その学びの場の環境で学生達は人に触れ、出会うことによって、影響や刺激を受け、知識をつけて社会に出ていくようになっている。

学びの場は通常、教室、キャンパスを中心に展開されるが、コロナ禍では自宅が基準となり、学生達が関わる人の数だけでも随分と差が出てくる。大学では、キャンパスで出会う仲間や科目によって新しい知識を

学び、刺激されたり、悩んだり、楽しさ、嬉しさ、悲しさを感じながらの喜怒哀楽も隣り合わせにあり、人との交流による社会的体験が自然と生まれる。自宅からのオンライン授業では、大学生活に慣れている2年生以上の学生にはオンラインでも良いという学生も多い。自分のペースで勉強ができ、時間も自由に使える、友人にも手軽に連絡でき、インターシップや就職活動、資格試験の勉強をしている学生もいて、時々友達と連絡を取り合い、話せばオンラインでも良いという。しかし、新入生にとっては、知り合いがいないオンライン授業は当初より緊張感と不安感があるのは当然であろう。大学生活に慣れるまでにかかる時間には個人差があり、一定の時間が必要である。そして、慣れる為には大学生だと実感する体験を学部、学科、クラスでお互いを知る場面が必要である。オンライン授業では自宅からではあるが、近い将来会えるクラスメート、仲間がいると実感することは一人の大学生としての自覚と意識が高まる。

学びの場が提供する「ひとびと同士の交歓」や「ひととひとのつながり」としての経験は、同値とはいえません。学びの場は、単に学習の場であるというだけではないのです。それは、「居場所」や「つながり」を人々に提供します。 中原 (2000) *2

授業実践報告

私が担当した文藝学部の英語 Output、英語専門科目（英語言語学、心理言語学）の授業の特性に合わせて、対面授業とは違ったアプローチが必要となった。教科書は同じものを使いつつ、教え方や小テスト、試験の方法も必然と調整が必要となった。手探りでオンライン授業を始め、授業運営を通して学んだことや同僚との意見交換もとても役に立ち、励ましともなった。前期と後期では授業の内容を改良し、学生にも慣れからくる様々な変化が見られた。

授業に関しては、前期で経験したことを元に改良した点も多い。例えば、効果的な課題設定、適切なフィードバック、一方的なリアルタイム配信ではなく、よりインタラクティブにする為に Zoom では適宜顔出しをし、学生に負担なく有効に使っていく。

本文では、それぞれのオンライン授業に関して、学生と教員の双方の観点からのメリット、デメリットを集めたデータ集計を確認し、これからのオンライン授業の可能性と実践を通じ習得した授業運営のアプローチを記す。

私の担当している授業では、Zoom を使ったリアルタイム配信型を中心に行い、適宜、大学授業支援システムで授業資料、教材などを掲載し、システム上で提出の課題、Zoom を繋げながらのシステム上での試験も行なった。Zoom の授業では、オリエンテーションで録画をしないと学生達にも伝え、発言やミニプレゼン、グループワークに恥ずかしがらず、積極的に参加して欲しいと話した。1人ずつ発表する際にも、大人数のクラスで自分だけカメラがオンになるというのは負担を感じる学生も少なくない。対策として、Zoom でのミニプレゼンはブレイクアウトルームでも学生に4、5人ずつカメラをオンにしてもらい、発表者は画面を見ながら語りかけるようにという具合で行なった。Zoom では、Wi-Fi 環境の問題が突然出てくることがあるため、何か問題があれば、その日のうちに担当者に連絡をするように学生に告げ、その状況を

考慮し、小テスト、ミニプレゼンは、次の時間に行うという風に臨機応変に個別対応をする必要性も出てきた。オンラインでは学生の反応が分かりにくいので、授業中にはチャット機能や反応機能を使い学生の質問や理解度を確認した。また、毎回の授業の後には質問や何かあればクラスに残るようにも伝達し、授業支援システムにも毎週の授業後に次週の講義連絡などを載せた。

英語 Output クラス

英語 Output の授業では、英語ミニプレゼンと英語のニュースを元にした教科書を使い授業を行なった。コミュニケーションの授業なので大切な事は対面授業と同じように進めたかったので、リラックスして話せる雰囲気をつかっていきたいと呼びかけ、毎週1分間の英語のミニプレゼンを通常の授業と同じように行なった。前期の最初の頃は学生の間にはZoomでカメラに向かって英語での発表は恥ずかしさと戸惑いが見られ、最初は声が小さく、間違えると声が小さくなることもあったが、回数を重ねるごとに慣れてきた。幸いにもきちんとミニプレゼンを用意してくる学生が多く、ブレイクアウトルームをよく使い、学生同士のコミュニケーションを活性化することが大事だと感じ、ミニプレゼンや課題発表の練習にも使った。これは対面授業にも通じるが、学生同士がお互いを知っていると、全体で発表するのもスムーズになってきた。

この授業では、通常、ニュース英語のDVDを全体で何回か視聴するが、ZoomでのDVD再生はかなり重くなり、上手く行かない事も良くあり、学生のWi-Fi環境にも個人差があり問題が生じることもあった。教科書にあるQRコードを読み入れて個人で授業前後に見てもらう方法をとったり、私のスマートフォンやタブレットをZoomカメラ前で再生し見せたりもした。期末試験では事前にスクリプトを提出した上で3分間のパワポなどの画面共有を使ったプレゼン、質疑応答をし、ベスト3スピーカーを学生から選んでもらった。

専門科目

1年生必修科目である英語言語学ではZoomを通してパワポを使い支援システムでの授業資料のアップ、課題設定し、期末試験では、エッセイの提出、質疑応答を含めたプレゼンをZoomで画面共有して行った。

1年生の授業なので学生達の戸惑いを強く感じた。大学生活最初の授業からオンラインで自分の部屋から受けるわけである。知り合いを作るチャンスがないというだけでなく、PCや各システムやサイトの使い方も分からない学生も多く、質問の中にこれらが出て画面共有でおさらいをしたこともあった。学生の緊張感や必死さも伝わってきた。英語言語学では、パワーポイントを使いながらの説明も多く、学生はカメラオフのことも多かったが、授業開始と終了の挨拶とブレイクアウトルームを使うときはカメラをオンにできる人はするという具合で行った。グループワークやディスカッションを通してお互いを知る時間も作り、普段専門クラスではやらない自己紹介やなぜ英語を勉強したいのかというトピックでの英語ミニプレゼンをする機会も設けた。学生達も教員もクラスメンバーについて知るきっかけとなった。言語学なのでオンデマンド

の授業も考えたが、Zoomでのディスカッションや意見交換は大変有意義であり、クラスメートの存在を意識し双方が知り合うことは、学生達にとっても教員にとっても授業がやり易く、質問や意見が言い易くなることを改めて感じた。このような活動から大学生だと言う実感が湧き、早くクラスメートにキャンパスで会いたいという学生も前期から出てきて、質問がよく出るクラスとなった。このクラスではZoom授業が中心で前期は課題提出、ミニプレゼン、期末試験は支援システムを使った時間指定試験を行った。後期はこれに課題授業を加え、期末試験では授業支援システム上でエッセイ提出をし、それに関してパワポを使いプレゼンをし、ベスト3スピーカーを学生から選んでもらった。

心理言語学では2、3年生が中心で大学生活にも慣れていたので、パワポを使ったZoomでの授業を中心に行った。選択科目なので集まる学生達も科目に興味のある学生が多く、ブレイクアウト機能を使ってのグループワークやディスカッションも積極的に行われた。前期、後期とも課題提出、期末試験はエッセイとプレゼンを行った。このクラスも当初はオンデマンドを考えたが、学生もZoomに慣れ、自分の考えを躊躇せず話す姿をみるとリアルタイム配信の良さを確認した。科目の特性や教え方、授業の方向性により最適なオンライン授業の形式が決まる。

ミニプレゼンを通してみたオンライン授業

私の担当する8クラス（他大学含む）184名の学生にオンライン授業の良し悪しというトピックで英語でのミニプレゼンをしてもらい、また首都圏の大学教員10人、合計25大学で教鞭を取っている先生方にもメリット、デメリットを記述アンケート式で調査した。

(2020年12月調査)

オンライン授業のメリット

学生

- ・朝早く起きなくて良い
- ・混んだ電車に乗らず通学時間がない
- ・交通費がかからない
- ・遅刻しなくなった
- ・時間を自由に使える（勉強時間、バイト、インターシップ、就職活動など）
- ・オンデマンドは好きな時に勉強できる

教員

- ・課題、資料の掲示や回収がしやすい
- ・テストなど自動採点（記号問題のみ）
- ・感染リスクを避けられる
- ・出席率が高い
- ・対面以上に自己学習ができる学生もいる

- ・私語がなく、集中が高まる

オンライン授業のデメリット

学生

- ・課題が以前より多い
- ・友達ができない（1年生）
- ・見ていないオンデマンドの授業がたまっている
- ・スケジュール管理をしないとダラダラ過ごしてしまう
- ・オンデマンドは質問ができない
- ・Wi-Fi が不安定なことがある

教員

- ・オンライン授業のツールや大学によって違うプラットフォームに慣れること
- ・授業前後の準備が対面授業より時間がかかる（講義連絡、課題フィードバック）
- ・評価が難しい（公平、公正の試験の難しさ）
- ・本来の試験ができない（持ち込み不可の実施が困難）
- ・Wi-Fiトラブルを欠席や未提出課題の理由にする
- ・学生の反応がわかりづらい
- ・インフラ面の整いで差が出る
- ・目、肩、首、腰の痛み

オンライン授業とは、個人の好みや科目の特性で肯定的に捉えられたり、否定的にも捉えられる。今までとは別の方法の授業で学生にとっても教員にとっても新しいスタイルの授業である。授業は対面だけではないということが分かり、PCやWi-Fiが整った状況では、オンライン授業はどこからも受講できる有効なもう一つの授業形式であり、今後の授業に変化を加える存在になるだろう。

また朝日新聞（2020年8月24日）によると、「学生からはオンラインの方がかえって発言しやすいと声がある」、「オンライン授業の導入で、出席率やレポート提出率が上がった一方、ウェブ会議システムZoomなどに不慣れな一部の学生は課題に手間や時間を要している」とある。

結論

以上のように学生と教員の立場から様々な結果を確認することができた。オンライン授業は今回の第一の目標である感染防止に関して達成している。対面と比べるとオンライン授業では内容の差異が出てくるのも当然である。その違いを踏まえた上で教員側の新しいツールを使いこなし、対面授業とは別の授業という認識が重要で授業準備をし、学生の立場も考えながら授業の向上に挑む体制が必要不可欠である。特に1年生へ配慮は各担当教員だけではなく、学科、学部、大学でのサポート体制を充実する必要がある。学生側も通

信環境をしっかりと整え、PCを含む情報通信スキルの向上でより良いオンライン授業で学ぶことができる。

オンライン授業はハードルが高いと思われがちで、教員も学生もまだ新しい形式で不安が多かったのも事実だが、教員向けオンライン授業講座等のリソースは大学の研修会をはじめ、学会での講座、ブリティッシュカウンスルなどHPや無料講座、YouTubeにも数多くあり、参考にできる。

授業の特性によって対面しかできない事があるのも事実だが、場所に関係なくオンラインで授業を展開出来ることは、今後、災害や天候不順で休校にすべき時にオンライン授業をすることが可能になり、安定した教育の提供を可能にする。そして様々な事情で通学が困難な学生にも出席のハードルを下げる事で、教育の機会を平等に与えることもできる。今回は入院中の学生が病院や実家から、また多少の体調不良でも授業参加が可能となる学生もいた。

文科省（2020）は多くの大学のオンライン例などを挙げ、ハイブリッドの有効性も支持している。ハイブリッドでの授業形式の2つ以上の授業形式を組み合わせたハイブリッド授業に関して教員も学生も1日のうちにオンライン、対面授業があることが出てくるため、大学側は学生、教員がオンラインで使える十分なスペースの確保やネット環境の適切なメンテナンスも必要になってくる。感染状況によってオンラインと対面の授業を適宜組み合わせるといのはより効果的であるが、教室で対面授業をしながら同時進行でのリアルタイム配信は教員にとって1つの科目で2種類の授業を同時に行うこととなり極めて難しい。リアルタイム配信では様々な事が起きるので、画面に集中する必要がある。Wi-Fiが落ちれば学生は再入室ということなどもあるので、この場合にはTAや補助をしてくれる人の存在が必要になる。

このコロナ禍を通り抜けた後には、多くの企業や学校でオンライン会議のツールを使う機会が以前より増えるであろう。移動することなく授業、会議や仕事をこなせ、このコロナ禍でも会社や企業の縮小を図り首都圏を離れてオンラインの仕事や在宅勤務をする人達も増えてきた。未来を担う大学生には将来、職場で必要となるPCを使った様々なスキルを身につける事は社会人になるための準備期間にもなりうる。

参考文献

朝日新聞（2020）8月24日（月）朝刊 『開く日本の大学』朝日新聞・河合塾調査

天野貞祐（1949）『学生に与ふる書』岩波新書

山口和範（2020）9年前の震災と同じではいけない、朝日新聞、E du A 4月4日

中原淳（2020）NAKAHARA-LAB 2020年12月12日アクセス

「学びを止めないオンライン教育」4月17日*1

「オンライン授業の効果は「対面授業」より低いのか？」4月27日*2

ブリティッシュ・カウンスル（2020）『英語教員向けのオンライン指導コース』、6月18日

2020年12月12日アクセス

U.S. Department of Education “Evaluation of Evidence-Based Practices in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies.”

2020年12月12日アクセス

文部科学省（2020）『コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について』資料2-1, p.13

データ集計 学生編 オンライン授業のメリット、デメリット 担当する8クラス（他大学含む）184名の学生のミニプレゼン集計。

教員編 首都圏の大学教員10人、合計25大学で教えている教員に書き込み式アンケート調査集計